

若いお母さんたちへ

菊池慶子



我が家には三人の子どもたちがおりまして、上二人が

女の子で、小学四年生と二年生、末が男の子で、幼稚園の年長組です。それぞれ十歳、八歳、五歳に成長したわけ、母親の私も、子育て十年ということになります。

何事も「十年一区切り」と申しますが、私もこの辺で、無我夢中で過ごして来たこれまでを振り返り、次なる新しい段階へと踏み出して行きたいものだと、時には考え

たりもしております。

思えば、この年月を通しての子どもたちの成長の確かさに較べると、母親である私は、まさに、「十年一日」の如き歩みでしかないようです。その日その日、精一杯やって来たつもりではあっても、振り返ってみれば、悔いることが多いのです。どうでもいいはずのことに心を奪われてしまって、子どもにとって本当に大切なことをし

ないで済まず、ということが、よくあったように思われます。それは、これからも常に自戒していかねばならないことだろうと思います。私が特にこういう反省をするようになったのは、二年ほど前、機会があり、Hさんというボランティア活動家の話を伺った時からでした。

Hさんは、都会の出身ですが、縁あってこの岩手の農村に嫁いで来たのでした。ご主人は農家の跡取りです。

やがて長男が生まれたのですが、病弱で、先天性の心臓病と診断され、数年の命だろうとの宣告を受けました。

そして、激しく泣かせてはいけない、走らせてもいけない、と言われ、文字通り、つきつきりでの生活が続いたそうです。そして、その子も、もうすぐ五歳という頃のことです。猫の手も借りたいというほどの農繁期、Hさんも農家の嫁として気が気ではありません。「東京から来た嫁は、弱い子を生み、ろくに野良仕事もできない。」近隣でささやかれているそんな言葉は、とうにHさんの耳にも届いているのです。どうやら、子どもは眠ったようです。「どうか、一時間だけ、いい子で寝ていてね。」

と、Hさんは眠っている子に言い聞かせ、田んぼに急ぎました。しかし、何分も働かないうちに、Hさんは何か胸騒ぎを感じ、家に向かって走り出しました。そして、Hさんが見たのは、道の途中で倒れている我が子の姿でした。お母さんがそっと出掛けてまもなくめぐめてしまったその子は、泣きじゃくりながら追いかけて、生まれて初めて数十メートルも走り、とうとう倒れたのでした。

腕の中で冷たくなっていく我が子を抱きながら、Hさんは、「何と馬鹿な母親だったのだろう」と悔恨の涙がとまらなかつたと言います。たとえ医師に宣告を受けていたとは言え、この時の悲しみと悔いは大変なものだったでしょう。Hさんは、「あの時、自分は、一番大切なものを見失っていたのです。」と語っていました。農作業の忙しさ、周囲への気兼ね、そんなもののために、自分の一番大切な仕事をおろそかにしてしまった…と。

その後、Hさんは数人の子どもに恵まれ、農家の主婦として逞しく働く傍ら、地域のために、「子ども文庫」や「お話キャラバン」などの活動のリーダーとして、よ

い仕事をしておられます。おそらく、あの時の体験が、Hさんの活動を底の方から支えているのに違いありませんが、母親としての辛い思いはいつまでも消えることはないでしょう。

この話を聞きながら、私は、私自身の母のことを思っていました。

私に初めての子どもが生まれた時、母が言ってくれたことはこうでした。

「子育ては重点主義でやりなさい。たとえば、家の中がどんなに散らかっていたって問題ではない。そんなもの、子どもが大きくなりさえすれば自然に片付いてしまう。できる限り、ゆったりと一緒に遊びなさい。」

母は、公務員としての勤めを持ちながら、私たち子ども四人を育てた人です。家には祖母もいましたし、それほど寂しい思いをしたという記憶はないのですが、やはり母親とすれば、誰の手にも渡すことなく、完全に自分の手で育てたかったという思いが残るのでしょう。仕事の忙しさや、周囲への気兼ねなどから、思うように子ども

とつき合えなかったという悔いなども、年月を経てもなお、心にあったのかも知れません。母は、家にいて子育てに専念できる立場にある私に、ぜひ自分のそういう思いを伝えておきたかったのだろう、そう感じながら、私はこの言葉を受け取ったのでした。

私自身、初めての子育てにあたって、心に思っていたことがありました。それは、人間にとって、「本当に大切なこと」というのは、そうたくさんはあるはずがない、だから、本質的なこと以外は、全く自由にさせてやりたい、ということでした。また、我が子を他と比較してとやかく言うまい、とも決心しておりました。

子どもたちが幼いころは、やれコップをひっくり返したの、おもらししたの、通りへ飛び出したから追いかける、とかいうような大変さはありましたが、ともかく、「我が子は何とかわいいのだろう、有難い。」という幸福な思いで満たされており、忙しいながらも楽しい毎日が過ごせたように思います。

しかし、子どもたちもやがて成長し、一人、二人、と

学校へ上がり出すあたりから、いささか様子が変わり始めたのです。

まず、学校というところへは「何時何分」までに行かねばなりません。「宿題」もやって行かねばなりません。「給食」も残さず食べなければ、みんなのような「ごほうびシール」がもらえないのです。長女のMには、そのすべてが、とても大変でした。やがて私は、気が付いてみると、我が子をせき立てる母親へと変わってしまいました。いつのまにそうなってしまったのかわからないまま、どうして家のMは他の「しっかりした」お子さんのようにいかないのだろう、何とか人並みに、とか、そんな思いで苛立つことも度々出て来ました。Mは特に、計算が嫌いで、毎日のように出される算数の宿題が苦痛なものでした。とても時間のかかる様子を見ていて、「これは、ちょっと宿題の量も多過ぎはしないか。」と思つて、ある時、学級懇談会で担任の先生に話したことがあります。が、返つて来た答えは、「私は十五分でできる宿題しか出しておりません。」というもので、他の親

たちも、それについて異議はない様子でした。「どうして家のMだけがこうもスローモーなのだろう。」いつものように、私の思いはそのところへ行きついてしまうのでした。

一、二年のころには、学校生活のスピードになかなかついていけないせいなのか、Mは時々、登校を渋ることもありましたが、お友だちと過ごす楽しさで、何とか休まず通い続けました。帰つて来れば、すぐ遊びが始まり、夕方まではMの生き生きとした時間です。夕食後、妹弟たちと遊んだり、好きな本を読んだり、またたく間に時間は過ぎてしまいます。妹の方はその間に、さっさと宿題やら翌日の用意を片付けてしまい、好きなことをしています。「Mちゃん、やらなくちゃならないことはパッパッと済ませて、それからのおんびり遊んだら？」と、たまに声を掛けてはみるのですが、Mが宿題を広げるのは、眠くて目がショボショボし始める頃なのです。またまたあの計算問題。「何でこんなのかなあ。あんまりこんなやると、人間のだいたいな頭が悪くなる

感じがする。」Mは、二年生のころ、宿題をやりながら、こんなことを呟いていたこともありました。気乗りしないのですから能率も上がらず、途中でやめて寝そべってマンガを見たり。私は、声を掛けるべきかどうか、迷ってしまのですが、結局、「もう九時だから、おふろに入りなさい。」と一言だけ言うのです。M自身も、「うん、もうだめ。明日にするね。」と切り上げて行きます。で、翌朝は、ともかく自分で起きて、何とか宿題も仕上げ、出て行きます。こう書いてみると大した事でもなさそうにみえるかも知れないのですが、私の心の中は、「大した問題ではないし、Mがいろいろ試行錯誤してわかっていけばいいのだから、黙ってみていてやろう」という思いと、「いや、ここでちゃんとした習慣をつけてやるのが親の役目ではないのか。」という思いとで、度々、わからなくなってしまふのでした。

一年ほど前の記録をみると、Mのことで次のように記しています。

「宿題をやる時、ピアノの練習をする時、その他、何か

を「やらねばならない」時の、あのシブシブノロノロという様子は一体何なのだろう。Mが生き生きとしているのは、どんな時だろうか。それは、好きなことを自発的にやっている時だ。考えてみれば、それはあたり前のことではないか。しかし、何とかしていやなこと踏み越えてやっていってこそ、人は成長していけるのではないのだろうか。また、好きなことをする場合でも、より深めていこうとするなら、いろいろと我慢してやっていかねばならないこともでてくるはずだ。そこところが、今のMには育っていないのではないか。でも、きっと心配はいらない。長い眼でみれば、もう以前とは違ってきているし、スローモーではあるけれども、学校の課題だって正確にやり遂げているのではないか。いずれは、それもこれもちゃんと育っていくのだ。」

苛立っていた気持ちだが、書き記してみることによってまにか鎮まっていたことが、今になって読み返してみてよくわかります。記録をつけるということは、何よりその時々のお母自身のお心の沈静の意味が大きいことを感

じさせられます。たまにはありましたが、こうした日記風のものを書くことで、どうか自分を保ち、それほどは方向を誤らずに済んだのではないかと、今にして思われます。

しかし、それにしても、子どもたちが成長し、それぞれの集団の一員となっていけば、否応なしに時間や義務に追われる面は多くなって、幼い時のような親と子の純粋な関係を保つのはなかなか難しくなっていくように思います。何とかして、子どもたちの一人一人とゆったりと過ごす時間を作りたいと願っているのですが。

それに、学校も社会も、「競争」です。そんなもの、たとえあっても、あたかもないかのように振る舞っていくことだって、もちろんできるでしょう。しかし、やはりそれはとても難かしい。親たちはまだいいとして、学校での子どもたちは、常に較べられ評価され、もう、「それはそういうものだ」と思い込んでいて、ほとんど疑うこともないのです。

もう十数年も前のことになりましたが、こんな光景に出

くわしたことがありました。あるパートで子どもの絵の展覧会が開かれていて、私はそれを見に行ったのでした。全国から応募された夥しい作品の中から選ばれて等賞がつけられ、広い会場の中には、本当に見事な出来ばえのものばかりが展示されていました。私は、「よく描くものだなあ」と感心しながら、一つ一つ見て回っておりました。するとそこへ、ひとりのお母さんが、小学生らしい子どもを三人ばかり連れて、何だかせわしく入ってきました。見ていると、そのお母さんは、入口付近に立ちどまって場内をみわたすなり、大きな声でその子どもたちに言いました。

「いいかい。よく見るんだよ。そして、今度はこんなふうを描くんだよ。」

言われた子どもたちは、途端に神妙になり、うつむいたままお母さんに引っ張られるようにして中の方へ入って行きました。

この光景は何故かいつまでも心に残り、特に、我が子たちがあの子どもたちと同じ位の年齢になりつつあるこ

の頃、度々思い返されるのです。

子どもたちが学校で受けている教育というのは、もしかすると、あの時のあの母親の言葉でまさに表わされるようなものではないでしょうか。そしてまた、あの時は、うなだれていた子どもたちを気の毒に思ったはずの私が、近頃あの母親の方に似て来てはいないかと思われたいのです。

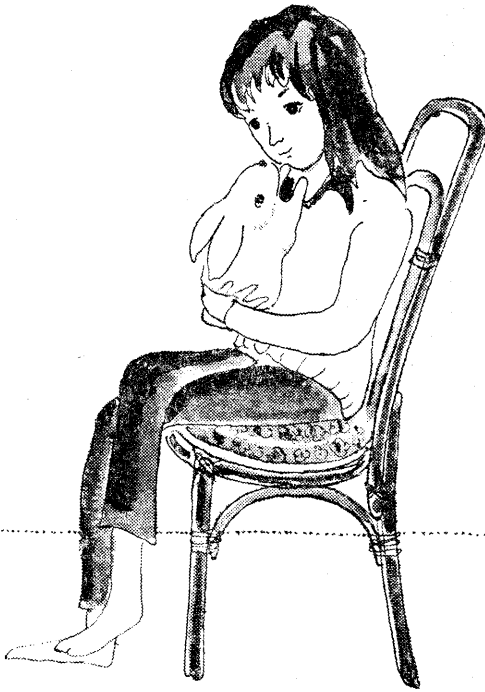
絵に限らず、作文であれ他の課目であれ、その出来を人と比べる必要などもとまないとはいえずです。すべては、それを通して子ども自身が豊かになっていくためにあるのだし、最終的に、自分でなければできない何かを見出し成し遂げていくために教育はあるはずなのですから、まず母親が、他からの評価などで心が揺れ動かないようにならなくては、と思うのですが、その境地にはまだまだ遠いというのが正直なところです。

こんな母親の思いを知ってか知らずか、Mは、大好きな本の世界を次第に深めていっている様です。このところ何度も繰り返し読んでいるのは、ローラ・インガルス・

ワイルダーの「大草原」のシリーズです。「宿題」も「ピアノのおけいこ」もそっちのけで熱中しているだけあって、Mが本の中からつかんで来るものとはとても確かなように思われるのです。いつか何気なくMが言っていたのですが、「お母さん、大草原の本に一番多く出てくる言葉は何だと思う？ それはね、『みちたりていました』という言葉なんだよ」というのです。それを聞いて、一瞬ぎくりとしてしまいました。いつも、能率的に家事を進めることを考え、子どもたちにも「先々のために」などとあれこれ要求する自分が、何か前のめりに貧しくなっていくように思っていた矢先だったからでした。日々の生活の中で何だか欠けていきつつあるようだった大切なものをほかならぬMによって指し示された思いがしたのでした。

どうやら、これからの私の「子育て」は、むしろ、子どもたちが与えてくれるものの方が多くなりそうです。本当は、これまでだってそうだったのかも知れませんが。

Mのことにばかり集中してしまったようです。二番目のHや末のSのことになると、不思議と余裕をもって見ていられるのです。Mは何と言っても初めての子どもで、すべてが「初めて通る道」だからなのでしょう。親の方の緊張が高くて、Mには済まなかったという思いもあります。それだけ、Mは心の細やかな子に育ったようにも思います。また、MあつてのHやSなのだということも忘れてはならないと思っています。



子どもの成長は本当にたちまちです。その時には悩みや苦しみであったものも、大ていはいい思い出に変わってしまいます。そのことを心にとめて、先を急いだりせずに、子どもたちの生活を楽しんでいきたいものだと思います。